

上御園遺跡発掘調査現地説明会資料

小牧市教育委員会

平成19年 1 月13日（土）午後 2 時

遺 跡 名 上御園遺跡（かみみそのいせき）

所 在 地 愛知県小牧市堀の内五丁目地内

調査理由 小牧堀の内土地区画整理事業

調査期間・面積

平成15年11月～平成16年 1 月 範囲確認調査 276㎡

平成16年 4 月～11月・平成17年 1 月～ 3 月 第 1 次発掘調査 2, 250㎡

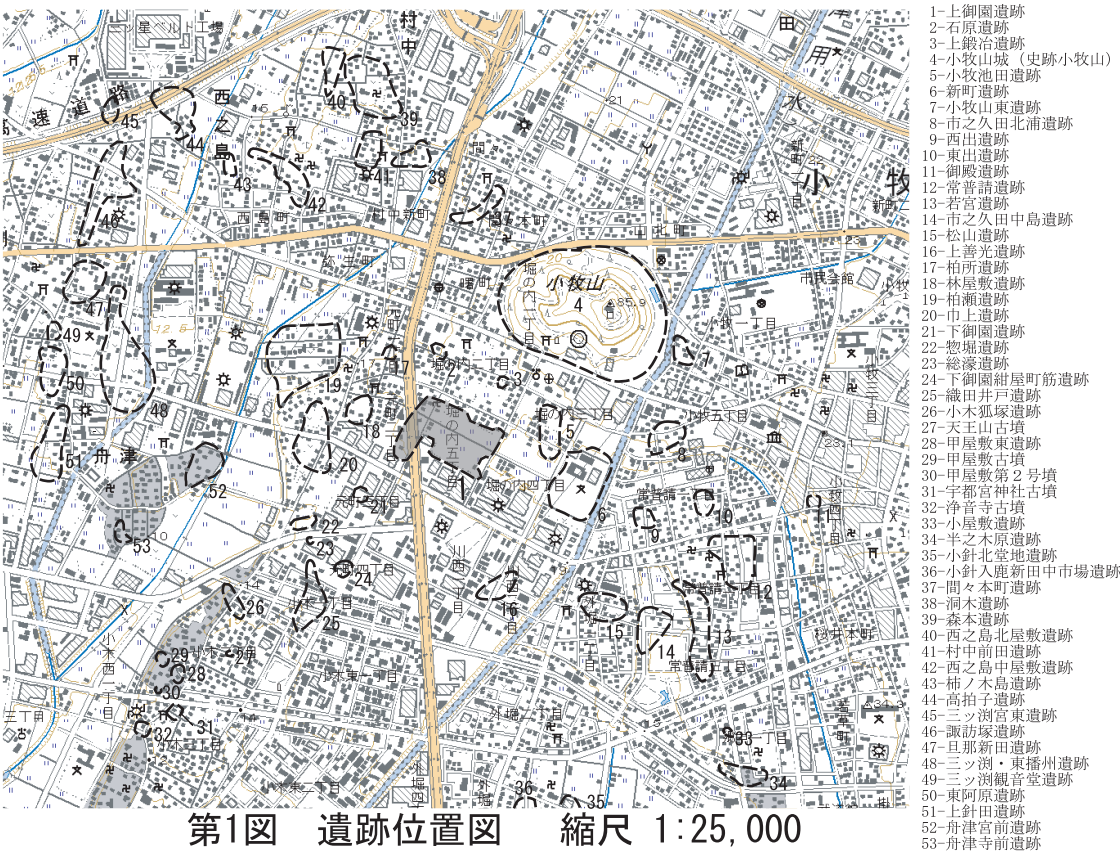
平成17年 5 月～12月 第 2 次発掘調査 4, 130㎡

平成18年 6 月～12月 第 3 次発掘調査 3, 000㎡

調査主体 小牧市教育委員会

調査受託 第 1 次調査（後半）・第 3 次調査 朝日航洋（株）

第 2 次調査 玉野総合コンサルタント（株）



1. 遺跡の概要(第1・第2図)

上御園遺跡は、史跡小牧山（小牧山城）の南西に位置し、標高18m程の洪積台地上に立地する。平成元年度に小牧市教育委員会が実施した市内遺跡詳細分布調査により新発見された遺跡で、永禄6年（1563）に織田信長が清須から小牧山に居城を移した際に整備された城下町の範囲内に含まれる。

信長の築いた小牧山城は、史跡整備に伴う発掘調査で一部ではあるが明らかとなった。主郭部分では自然石の巨石を用いた石垣が、大手道では道の両側に人頭大の自然石が約3段積まれた石垣が築かれ、石を用いた城作りがされていたこと、山の東麓から北麓にかけては、堀や土塁に囲まれた武家屋敷群が10区画以上連なっていたことなどがわかってきた。

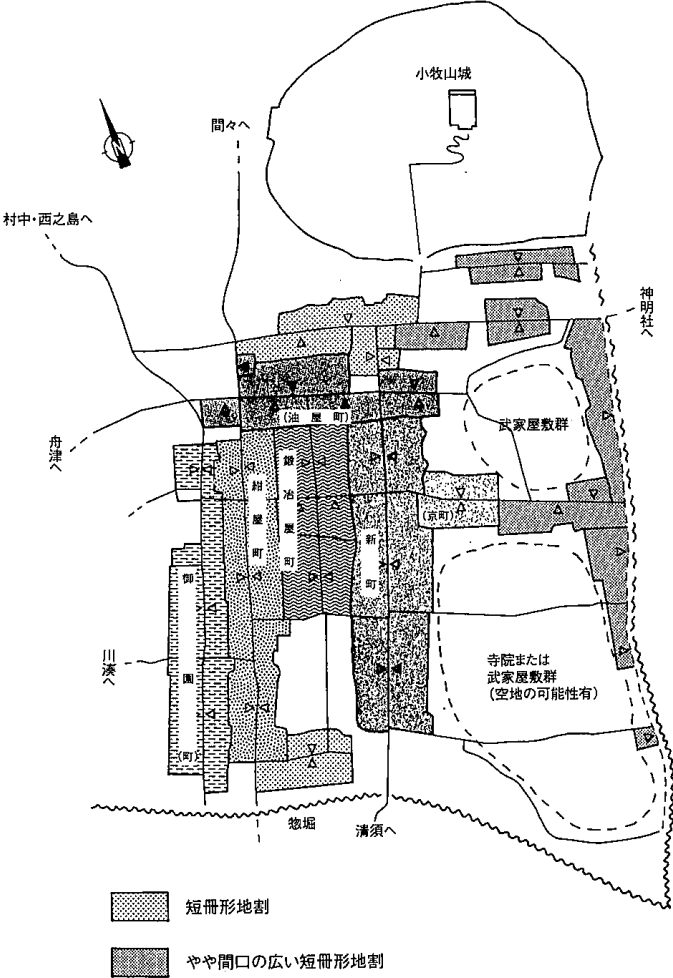
小牧山の南に展開する小牧城下町は、江戸時代の村絵図や明治時代の地籍図等を用いた研究によれば、南北1.2km、東西1kmの範囲に南北4本、東西5本の街路が配置されて町が区画され、南端には土塁と堀による惣構えが築かれていた。

小牧に移ってきた4年後の永禄10年に信長は稲葉山（岐阜）へ移ったが、町場は規模の縮小があったものの存続し、天正12年（1584）の小牧・長久手の合戦の際には惣構えの虎口が改修された。江戸時代に入り、元和9年（1623）に尾張藩による上街道の整備が行なわれると、町はここから約1.5km東の現在の市街地へ移転した。

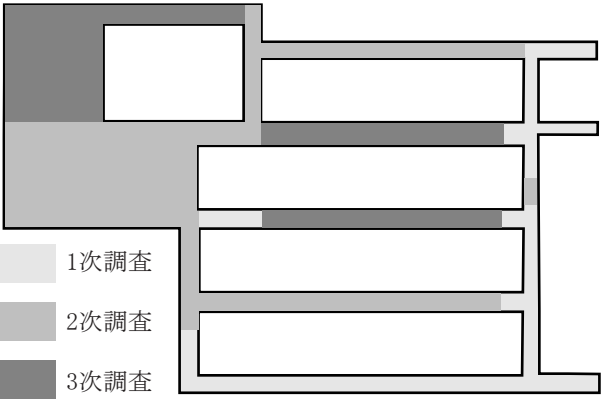
周辺には、分布調査で確認された中世の遺跡が点在し、城下町の時期に該当する遺物も採集されているが、小牧中学校の移転に伴って発掘調査された新町遺跡を除いては、詳細は不明である。新町遺跡は本遺跡の東約300mに位置し、平成6年度から8年度にかけて調査が行なわれた。中学校の校舎部分の調査では、幅2m程の堀で囲まれた東西45m、南北35mほどの武家屋敷が確認され、敷地内には掘立柱建物跡2棟や井戸などが見つかった。また、中学校南側の東西道路部分の調査では、下級武士の居住域が確認された。

2. 調査の概要(第2～第5図)

範囲確認調査 区画整理事業の道路予定地に試掘トレンチを入れたところ、場所による分布の濃淡はあるものの、ほぼ全域で遺構が確認された。主な時期は永禄期から江戸時代初めのもので、遺物では、瀬戸美濃産陶器、土師器などのほか、「鍛冶」とい



第2図 小牧城下町概念図
(小牧城下町新町遺跡 1998より)



第3図 上御園遺跡1～3次調査範囲



第4図 上御園遺跡第1～3次調査全体図 (S=1:1000)

う地名のとおり、鍛冶関連品の出土がみられた。この結果、当初は旧清須道（城下町の推定復元における紺屋町筋）に沿う部分のみであった遺跡範囲が、東側へ約200m拡大し、紺屋町、鍛冶屋町、新町、油屋町の4町を含むこととなった。

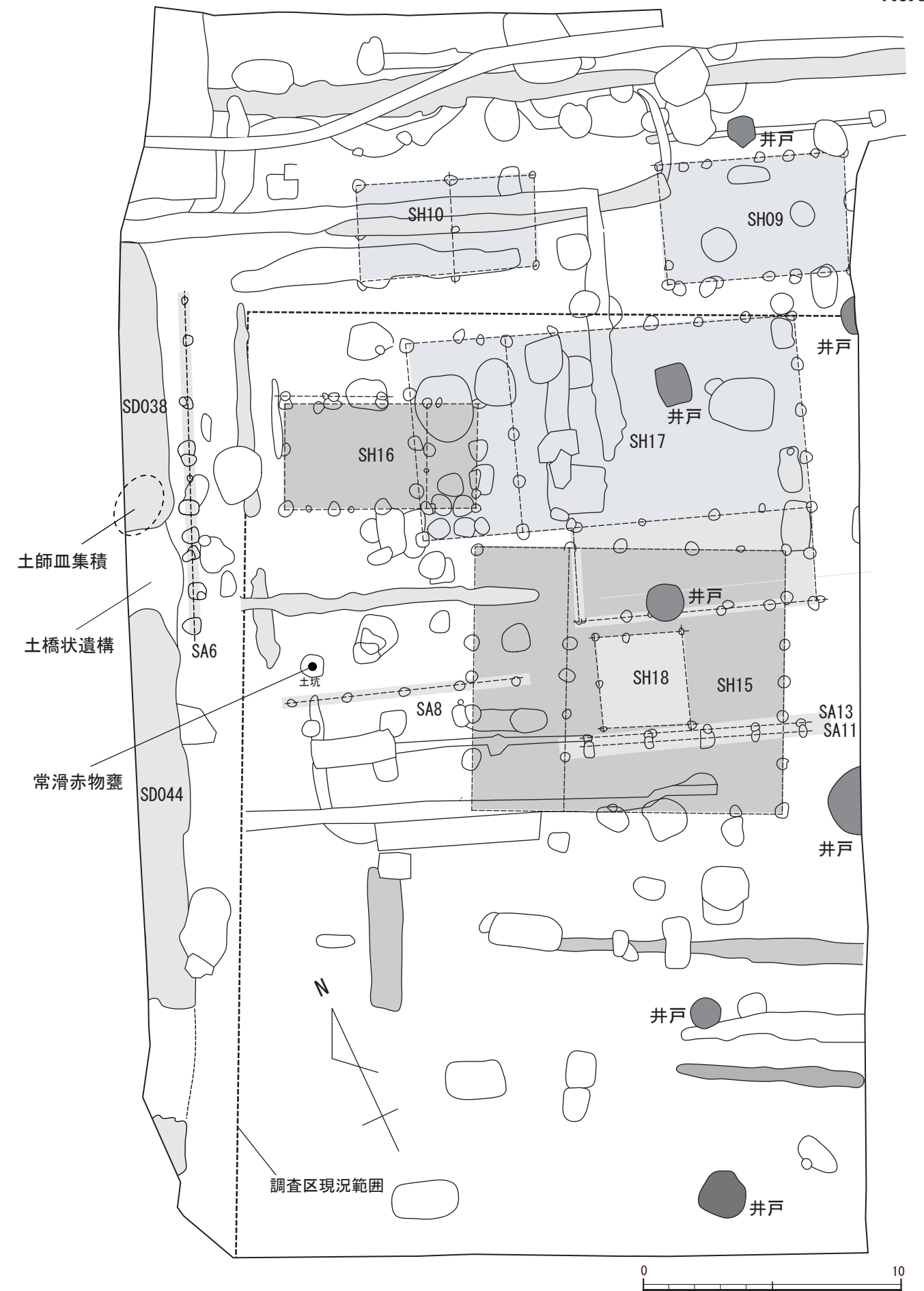
第1次・第2次調査 確認した遺構は土坑約670基、溝約170条、井戸12基、ピット（柱穴等）約1,250基、掘立柱建物跡18棟、柵列7列他である。

鍛冶屋町の街路にあたる部分は、幅6～7mにわたり、40cm程低くなっており、街路は屋地より一段低くして設けられていたようである。その範囲の中に数条もの溝が確認され、状況は複雑になっており、一段低くなった幅すべてが街路であったかどうかは不明である。6-1道、6-4道では、鍛冶屋町の街路に近い位置で掘立柱建物跡が、その奥では埴塙、炉壁、鉾滓、金属製品、火を受けた礫など鍛冶関連品が主に出土する土坑などが確認されている。明確な鍛冶遺構は確認されていないが、付近に存在したことがうかがわれる。新町にあたる6-1道東部、6-5道、4-1道では、井戸や掘立柱建物跡、建物を構成していたと考えられる多くのピットを確認した。6-7道では、鍛冶屋町と紺屋町を区画する溝が確認された。確認した長さ90m、幅2～4m、深さ40cm～1mを測る。底面の所々で、土師器の皿（直径約5cm、高さ約1cm）が十数点まとまって出土するという状況がみられた。調整池用地では、掘立柱建物跡4棟、井戸2基、柵列3列などが確認された。建物跡は重複しているので、少なくとも2時期ある。

出土遺物は後述する第3次調査における出土品とほぼ同様であるが、その他に瀬戸美濃産陶器では片口、徳利、狛犬、土師器では火鉢、輸入陶磁器では青磁、金属製品では甲冑の材料である小札が出土している。

第3次調査 今年度を実施した調査区で、確認した遺構は土坑270基、溝75条、井戸10基、ピット（柱穴等）約800基、掘立柱建物跡18棟、柵列13列他である。

9-1道では鍛冶屋町の街路が検出され、幅7～8mにわたり1次・2次調査と同様に屋地より一段低く設けられていた。その範囲の中は溝が数条めぐり、土坑が含まれる複雑な状況を呈している。街路の両側には掘立柱建物跡が配置されており、西側のSH6は3間×5間で6.2m×4.18mを測り、東側のSH7は2間×3間で3.8m×5.14mを測る。6-3道は、鍛冶屋町の範囲にあたり街路・区画溝・掘立柱建物跡が検出されている。SH11は街路の東側に位置し、柱間が2間以上×4間以上、3.45m×7.5mを測



第5図 上御園遺跡第3次調査 公園用地遺構配置図 縮尺 1:200

る。街路の西側に位置するSH12、13、14は、調査地の制約で全貌は明らかではないが長さが10mを超えるものである。なお、9－1道、6－3道には鍛冶屋町と新町の区画溝が確認されている。

6－2道・公園用地では街路（旧清須道）に沿った区画溝（SD38・44）が検出された。SD38とSD44の間には土橋状遺構が認められ、この北側（SD38の底面）からは土師器の皿が数十点まとまって出土している。掘立柱建物跡、柵列は基本的に街路に平行あるいは直交する方向の軸に配置されているが、SH9・10・17・18、SA6・8・11・13とSH15・16とはやや軸方向が異なっている。また、これらの中には重複して確認されているものがあり、少なくとも2時期に分かれていることがわかった。SH17は第3次調査で検出された掘立柱建物跡の中で最も大きなもので、東西の長さ約15m、南北の長さ約11mを測る。

第3次調査の出土遺物には、陶器では瀬戸美濃産の天目茶碗・丸皿・端反皿・稜花皿・稜皿・灯明皿・志野丸皿・志野向付・鉄絵皿・播鉢・水注などや常滑産の甕、土師器では皿・内耳鍋・羽釜・茶釜・土鈴、鍛冶関連品では埴塙・羽口・鉄滓、鍛造剥片等がある。その他には古銭・釘・不明銅製品、漆碗、染付磁器も出土している。時期は戦国時代から江戸時代初頭にかけてのものである。

3. まとめ

3次にわたる調査終了後、遺構の性格、時期、遺物の時期など詳細な検討が十分進んでいない段階であるが、調査により得られた成果をまとめてみたい。確認した主な遺構は、土坑約940基、溝約245条、井戸22基、ピット約2,050基、掘立柱建物跡36棟、柵列20列であり、これらの時期は永禄期から江戸時代初めのものが中心である。城下町が建設された永禄期より古いものはほとんどないことから、信長は、それまでに集落がない所に新たに町を建設したことがわかった。これは新町遺跡の状況と一致するが、新町遺跡では存続期間が永禄期に限られることに対し、本遺跡では江戸時代まで続いていたという違いが明らかとなった。遺構の分布状況は、北部域で濃く、南部域（6－4道以南）では薄い傾向にある。公園用地、調整池用地の調査では、建物跡の重複がみられ、6－1道の鍛冶関連品の出土がみられた遺構からは、江戸時代初めの遺物が出土しているものがあり、南部域に比べて北部域において町の存続期間が長かった

ことがうかがえる。

遺構の規模や分布から屋地の規模を推定すると、遺構は街路から30～35m（16間～19間）の範囲に濃い分布を示しており、これは奥行をあらわしている。配置としては街路寄りに建物があり、奥まった位置に井戸が設けられている。間口については新町にあたる6－5道北半において確認した建物跡4棟の南北辺（街路に沿う方向）の長さは6～7mを測り、ひとつの敷地に建物が1棟であったならば（複数棟であっても街路に対して直交して並ぶのであれば）、3.5間～4間のものが主であったのではないかと考えられる。紺屋町にあたる調整池用地の調査では、柵列と溝の位置関係から約20m（11間）、同様に公園用地では約25m（13間）という広めの間口がみられる。